



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	雲南の「近代」を考え直す：世紀転換期における空間、メディアと知の交錯〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	董, 子昂
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第16323号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95255
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	DONG_Ziang_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：董 子昂

学位論文題名

雲南の「近代」を考え直す

ー世紀転換期における空間、メディアと知の交錯ー

本研究は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、近代雲南と関わる三つの社会、すなわち清末中国、明治日本、そしてフランス植民地帝国に注目し、雲南を中心とする雑誌メディアの流通、近代思想の受容と社会組織の再編を考察し、雲南における「近代」の到来過程を再考察するものである。

本研究の目的を達成するため、以下の三つの問題点を設定する。第一の問題点は、近代雲南の地域の特徴を考察することにより、どのような新たな視点を提示できるか、という点である。雲南はしばしば「西南中国」という枠組みで論じられるが、第一章では「西南中国」に含まれる雲南と中心（北京）の位置関係を相対化し、近代世界の起源とされる西欧の「極東」という観点から、雲南と「中心」の位置関係を再考する。こうした関係性の変化により、従来中国の周縁部とされていた雲南は、最も「先進的」な近代西洋国家と接触するフロンティアとなり、フランス植民地帝国の勢力圏に隣接する最前線へとその地位が変化した。フランスは宣教師や探検隊を派遣し、滇越鉄道の敷設を進めることで、雲南人に「近代」を具体的に体感させた。これに対して、雲南人の間では激しい反仏ナショナリズムが喚起されたが、同時に地域の近代化への転換も余儀なくされた。

このような二つの「中心-周縁」システムを浮き彫りにし、それに対する思考と反省を可能にしたのは、明治日本、そしてそれを基盤として雲南留日知識人によって創刊された雑誌『雲南』の存在である。第二章では、東京と昆明（雲南の省都）の地理的距離および知的ギャップを埋める役割を果たした雑誌の印刷と流通を検討する。『雲南』は、北京政府やインドシナ総督の管理・監視を免れた明治日本で発行されたため、雲南人が日本語を通じて当時最先端の西洋思想に触れる窓口となった。また、日本から東アジア、さらには東南アジアまで広がる流通網の活用により、雑誌は近代知識を中国西南部の奥地である雲南に伝達する役割を果たした。『雲南』の発行が可能となった背景には、明治後期に成熟した凸版印刷技術、明治政府が制定した「新聞紙条例」、および「第三種郵便物認可規則」があった。これにより、『雲南』は日本国内で合法的に出版されることができたのである。さらに、雑誌の販売および流通は、日本とフランス領インドシナを結ぶ客郵ネットに大きく依存しており、海路を経てフランス領インドシナ北部のハイフォンに上陸し、そこから国境を越えて雲南に到達した。当然、この過程は順風満帆ではなかった。『雲南』の存在に警戒したインドシナ総督からの通報を受け、明治政府が雑誌の責任者に対して取り調べを行ったが、結局、雑誌社は1911年まで発刊を継続した。

第二の問題点は、雲南人がいかに「近代」を思考し、理解したか、という点である。この問題を説明するため、本研究は雑誌『雲南』に掲載された文章を対象に、雲南知識人が考えた政治と国家のあり方に焦点を当てる。明治日本で高等教育を受けた雲南人は、雲南の文化的・社会的特殊性を重視しながら、中華世界の衰退と近代世界の拡張に対して、近代的なマインドセットを借用・模倣しつつ、内部を均質化するための複数の「戦略」を展開していた。

第三章では、雲南の知識人である呂志伊の翻訳活動を通じて、彼が明治日本の社会思想から「思想資源」と「概念道具」をどのように取り入れ、独自の歴史観を編み出したかを考察する。特に「国家」「国民」「民族」のあり方について、呂がどのように独自の議論を展開してきたかを説明する。翻訳を通じて、中華世界に深く根付いていた「循環史観」が「一国史観」へと置き換えられた。同時に、雲南の多民族的な特性が無視され、国民と民族の一致を基準にした国家論が構築されていった。このような歴史意識と国家論を用いて、呂を含む『雲南』の編集者たちは、雲南の歴史および非漢民族の位置付けに関する新たなナラティブを形成した。

第四章では、雲南の歴史と民族に関する叙述の再編を検討する。1907年に発行された『雲南』の特別増刊号『滇粹』の紙面分析を通じて、雲南に関する歴史叙述が清朝の定めた「公定的な歴史」から区別されると同時に、近代的な単線的歴史観を反映していることが明らかになった。また、『雲南』において、非漢民族の「土司」である刀安仁による投書と、土司を「同胞」と呼ぶ文章が同時に掲載されたことで、これまで排除されていた非漢民族が国民の原理に包摂され、将来の国家建設において政治的および文化的単位の一致が確保されたというナラティブが示された。

第三の問題点は、上述した雲南の地域特性に対する理解と近代思想を受容した雲南人の誕生を背景に、雲南がいかにして歴史的主体性を取り戻したか、という点である。この問題については、地方自治と議会制度を核とする近代政治体制の確立、および暴力の生産と行使が雲南政府によって独占される軍事体制の整備という二つの側面から説明する。

第五章では、近代雲南における憲政運動、地方自治、そして地方議会の連動について分析する。この章では、近代雲南の政治体制の樹立を、20世紀初頭の雲南憲政運動の起源、発展、そして一時的な終結を「中央-地方」関係の視点から検討する。その中でも、特に非漢民族の国民権利の取得、つまり投票権の保障に注目する。さらに、注意すべき点として、清末期の憲政運動の影響で設立された雲南省議会という議会体制が、辛亥革命を経ても中華民国初期にわたり維持されたことが挙げられる。つまり、本章では、清朝と中華民国の間に生じた断絶ではなく、近代体制の一貫性に着目し、雲南における立憲主義の流れを考察する。

この視点をさらに深め、第六章では、留日経験を持つ雲南の近代知識人たちが、辛亥革命を通じて軍の主導権を握り、さらに1915年に「護国」のスローガンを掲げて袁世凱の帝政復活に反対し、中央に対する戦争を起こして立憲制度を守ったという、雲南近代史における重要な事件を検討する。結果として、雲南は周縁性を脱し、新生した中華民国を守る上で無視できない軍事勢力となり、中華民国の再構築に寄与した。その後、一躍「軍閥」となった雲南は、その後軍事力が次第に衰退した。護国戦争に関する記念言説も国内外の情勢の変化に伴い、中華民国と中華人民共和国によって再利用され、変質してきた。

本研究では、近代雲南について社会史、メディア史と社会思想史の研究手法を用い、二重の「中心-周縁」関係から新たなアプローチを提示している。また、雲南研究における資料面の単一化を打破し、中国語資料のみならず、日本語とフランス語の資料を利用することで、複数の情報源から雲南の近代を論じている。さらに、これまで常は無視されてきた「多民族」の問題も再考察の一環として、本文の最初から最後まで貫く課題と設定されており、近代の到来に伴う非漢民族のイメージ変遷と国民身分の獲得、そしてその過程に潜む不安定な要素を意識しつつ描かれている。